

コラム COLUMN

# 差別のない明るいまちに ヘイトスピーチデモの経験から考える

問 人権センター  
(大津二、キラリ工草津内)  
☎563-1177、FAX563-7070

## 社会問題になった 「ヘイトスピーチ」

ヘイトスピーチという言葉をご存じでしょうか？ヘイトスピーチとは、特定の国の出身者やその子孫であることを理由に日本社会から追い出そうとしたり、危害を加えようとしたりするなど、街中で差別的な言動を行うことです。国内でも大きな社会問題となったことから、2016年6月に「ヘイトスピーチ解消法」が施行されました。

## 不確かなネットの情報を信じ込む

Aさんは、ネットで調べものをしていたときに、在日コリアンに関するマイナスの書き込みを見つけました。書き込みをいくつも見るうちに、その内容が確かな情報かどうかを確認することなく、Aさんは信じ込むよ

うになりました。その後、在日コリアンを批判するブログを見て、「マスコミが報じない真実が書かれている」と感じ、在日コリアンへのマイナスの思いをさらに強めていきました。

## 誤った正義感で行動する

ネットの情報に影響を受けたAさんは、ヘイトスピーチを繰り返している団体の活動に共感するようになり、活動に参加するようになり、誤った正義感から、デモに参加するようになりました。

## 同調圧力<sup>※1</sup>の影響を受ける

しかし、そのデモは、道中の店舗や買い物客も標的にして罵声を浴びせており、これに対して、Aさんは「まじいんじゃないか」とデモのメンバーに伝えましたが、そのことを逆に激しく責められることになりました。そのうちに、今度は、他のメンバーが「過激なデモはおかしい」と声を上げました。「デモを肯定するメンバーに合わせないと自分が標的にされる」という恐怖心から、Aさんは声を上げたメンバー

を追い出してしまいました。その後、デモに異議を唱えることなく参加しました。「雰囲気にならされて、感覚がまひしていった」とAさんは語っています。

## 偏見や差別のない社会を作るには

Aさんには在日コリアンとの出会いや憎悪感がなかったにも関わらず、ヘイトスピーチデモに関わった要因として「不確かなネットの情報を信じ込む」「誤った正義感で行動する」「同調圧力の影響を受ける」などのキーワードが挙げられます。これらのキーワードを日常生活の中で「わたし」にも重ねて振り返ると、当てはまることがあるのではないのでしょうか。Aさんを特別な存在として捉えるのではなく、Aさんの姿から「わたし」の暮らしの中で容易に作られる攻撃性や差別性、それらを生み出す社会のあ

りようについて、立ち止まって考える必要があると思います。全ての人が安心して暮らすために、Aさんをヘイトスピーチデモに向かわせた「偏見に満ちた周りの雰囲気によって差別が作られる社会」ではなく、「お互いを認め合える周りの雰囲気によって確かなつながりが作れる社会」をめざしたいものです。そのためにも「わたしたち」による人権についての学び合いが大切です。

「ヘイトスピーチ解消法」は、「本邦外出身者<sup>※2</sup>」に対する「不当な差別的言動は許されない」と明らかにしていますが、この法律が審議された国会の附帯決議では「本邦外出身者」に対するものであるか否かを問わず、国籍・人種・民族などを理由として、差別意識を助長し、誘発する目的で行われる排他的言動はあってならない」とされています。

※1 周囲の多くの人と同じように行動するよう、暗黙のうちに強制すること

※2 日本以外の国や、地域の出身である者、子孫であつて適法に居住する者

## より豊かな人生を送るために



# はしかわ市長の だいすき!くさつ

昨年の夏に開催されたいに盛り上がりました東京オリンピック・パラリンピックに続き、先月は北京で冬季オリンピックが開催されました。日々の報道では厳しい話題が多い状況ですが、選手の活躍に、元気づけていただきました。さて、新型コロナウイルス感染症の影響により、社会のデジタル化(情報化)が急速に進んでいます。ICT(情報通信技術)を活用した在宅での勤務や、非対面での会議の開催など、働き方にも変化がみられるようになりまし。行政サービスにおいても、ICTの活用が広がっており、本市でも、市役所の窓口に来ていただくことなく、各種の手続きや相談ができるよう、取組を進めています(詳しくは、4・5ページをご覧ください)。国や企業とも連携しながら、デジタルの活用による不安のある方に配慮し、誰もがデジタルを利用できる仕組みづくりを目指してまいります。

また、近年、ウエルビーイングといわれる、生きがいや健康、幸福を重視する考え方が高まっていて、本市ではこれまでから「健康都市」の取組を進めています。人生をより豊かに生きるため、ウエルビーイングに必要な視点の一つとして、

人生100年時代に向けた生涯学習の重要性がいわれています。好きなこと、得意なこと、人の役に立つことで社会参加を続けていくことが必要とされており、本市でも、学習ボランティア活動の人材バンク「ゆうゆうびとバンク」を設けていますので、身近な学びに活用いただければと思います(詳しくは7ページをご覧ください)。

新型コロナウイルス感染症につきましては、依然として不安な状況が続いています。市民の皆様には、発熱やのどの痛みなどの症状がある場合は、お近くの医療機関に電話で相談いただき、指定された方法で受診いただくようお願いいたします。また、混雑した場所や感染リスクが高い場所への外出は控えていただき、手洗いや手指の消毒、マスクの着用、換気の徹底、密閉・密集・密接の回避など、基本的な感染症対策を、家庭や職場で今一度徹底してください。これらの感染症対策については、ワクチン接種後も、継続をお願いします。

市においては、3回目のワクチン接種を進めています。追加接種の接種券が届いた方や未接種の方は、発症予防、重症化予防などの観点から、ワクチンの種類にかかわらず前向きな接種の検討をお願いします。

問 危機管理課(1階)  
☎561-2325、FAX561-6852

## 広がれ!はっぴー・ぼうさい 第12回

### 草津の防災力、どんどん高めていきましょう 関西大学 社会安全学部 近藤ゼミ

えふえむ草津でお届けしている防災番組「はっぴーBOUSAI」。シリーズ第113回(2月放送)では、「福島訪問記」をお伝えしました。昨年12月に福島県双葉町で、ゼミ生が現地体験したことを題材にして語り合いました。

双葉町は、東京電力福島第一原子力発電所が立地している自治体の一つです。現在も、全町民は町外に避難したままです。JR双葉駅で線量を測定すると、関西と同じ程度まで下がっていました。しかし町内には、放射性廃棄物を集めて保管する広大な「中間貯蔵施設」が建設されつつあり、かえって復興から遠ざかっている面があるとも聞きました。

今回は、特別に許可を得て、立ち入り制限エリアの中に入りました。地震、津波、そして原発避難という「三重苦」に遭った場所です。ある小学校を訪れると、そこは、2011年3月11日の「あのとき」のままの状態でした。地震直後に児童たちが身を寄せた教室の黒板には、3月11日の「日直さん」の名前が書いてありました。そして机の上には、ランドセルが置かれたままの状態でした。「あのとき」すぐに

津波避難のため移動し、さらに着の身着のまま原発避難をすることになり、埼玉県の廃校で集団生活を送ることになったからです。ランドセルは放射線が付着していることもあって、持ち主の元に戻すことができないのです。

先に「あのとき」のままと書きましたが、厳密に言えば、そうではありません。この11年という時の流れによって、無情にも町内の家々は朽ち果て、被害は拡大の一途をたどっています。被災した人たちの心も痛んでいます。世間で風化が進めば進むほど、苦しみを味わった町民が思いを吐き出せる機会も減り、傷が深まっています。草津市が福島県伊達市と「友好交流都市」の締結をしてから、丸7年が経ちました。もし将来、草津市が災害でひどく苦しい状況に陥ったとしても、福島の皆さんが、きっと心を寄せてくれることでしょう。

ラジオえふえむ草津 (FM78.5MHz)  
Happy BOUSAI 第1・3火曜日12:00~

